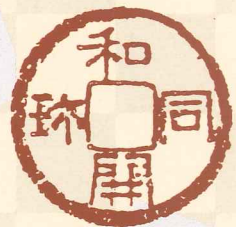
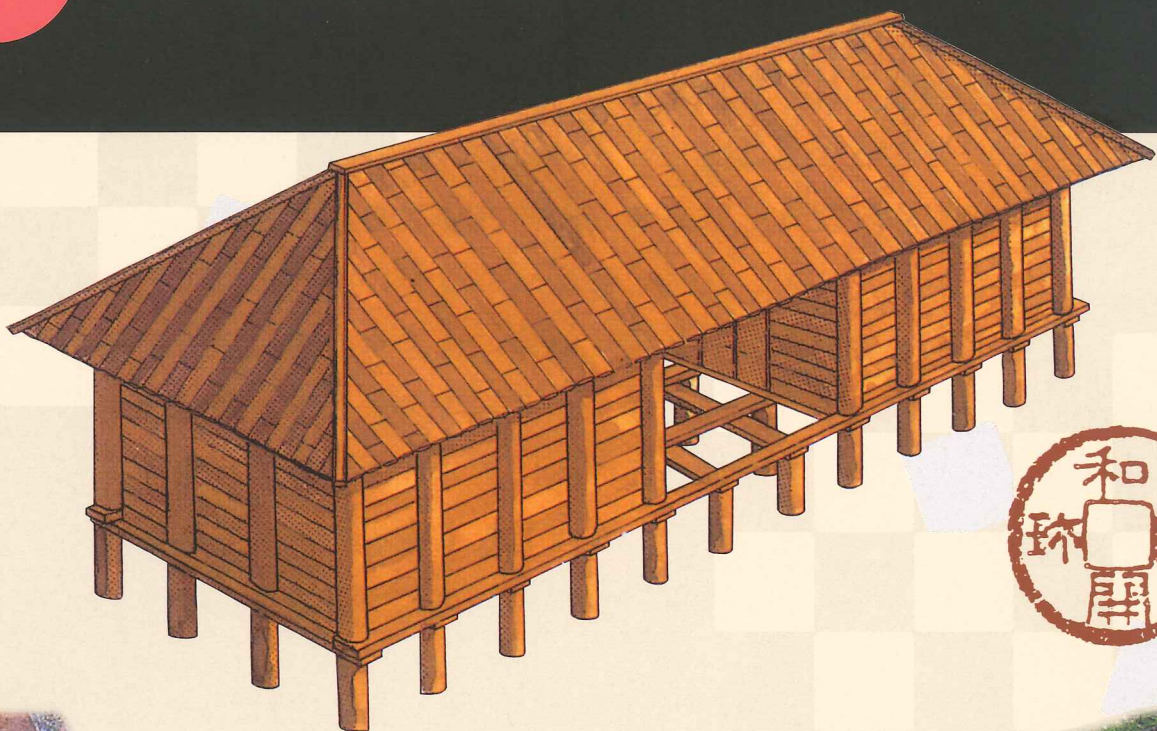
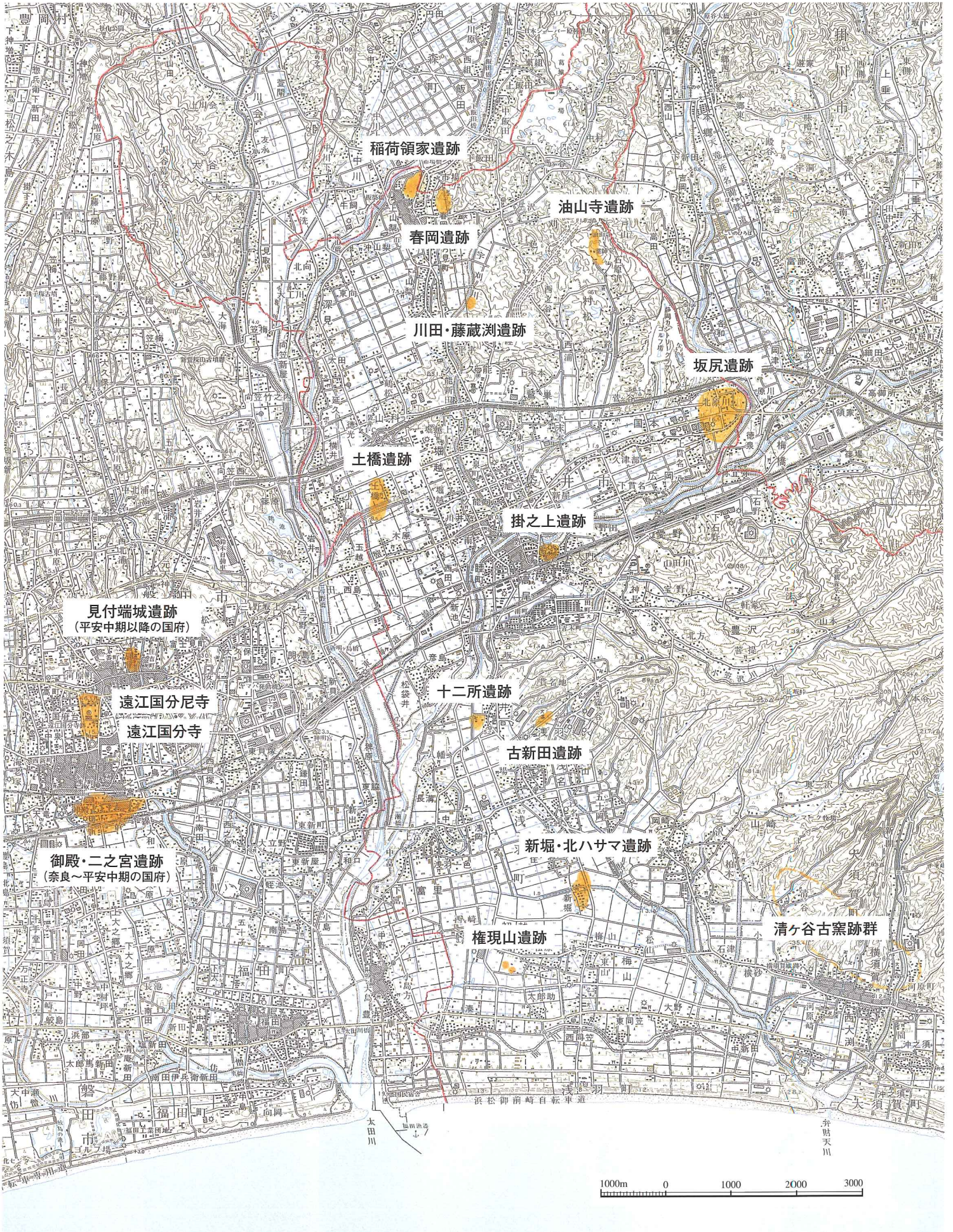


遺跡でたどる 袋井のあゆみ

第3弾 奈良・平安時代の巻



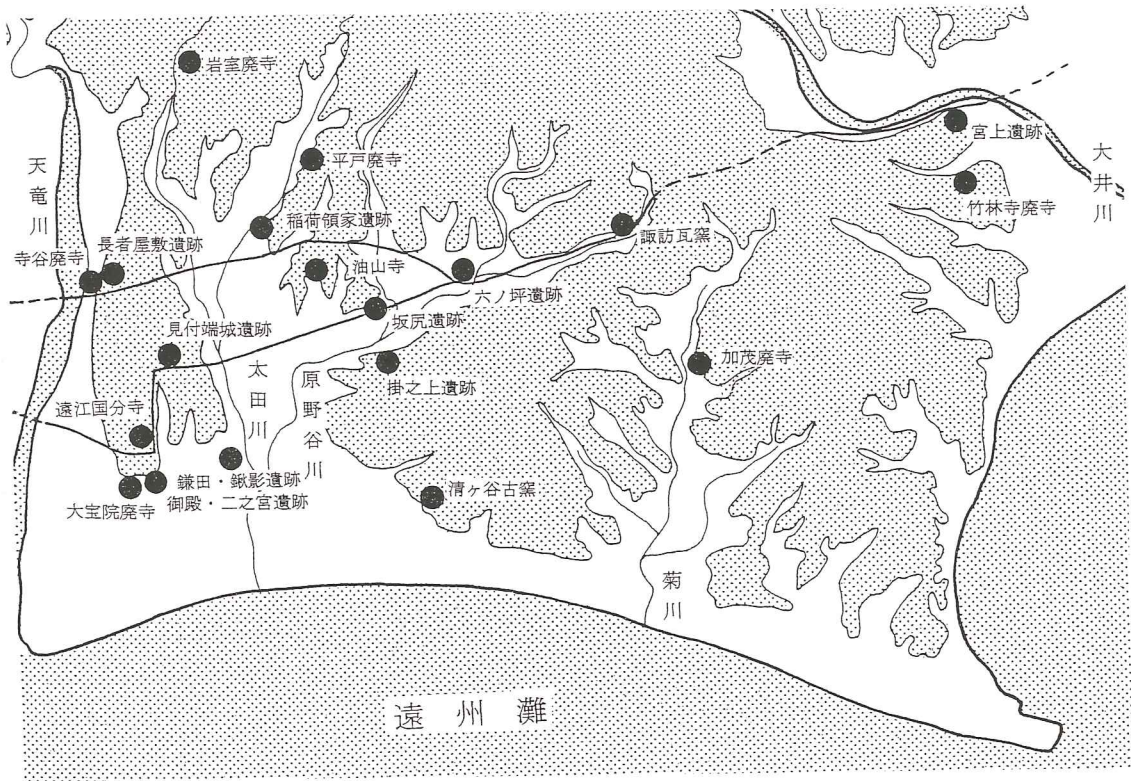
奈良・平安時代の袋井の主要遺跡



遺跡でたどる袋井のあゆみ —奈良・平安時代の巻—

袋井市内には、旧東海道に沿った佐野郡衙さやぐんがに関連した坂尻遺跡、山名郡衙しょうざうの正倉と推定される掛之上遺跡、広域条里の存在をうらづける春岡遺跡、川田・藤蔵淵遺跡、原野谷川の舟運と関連する山名荘やまのしやうの諸井十二所遺跡、遠州灘に通じる潟湖（ラグーン）に面した新堀・北ハサマ遺跡など、奈良・平安時代を代表する重要遺跡があり、これらを通じて古代の「袋井」を見てゆきましょう。

郡衙…律令制のもとで、郡の官人（郡司）が政務をとった役所。郡司が政務にあたる正殿・協殿のほか、田租・正税出挙稲を保管する正倉、宿泊用の建築から構成される。



遠江国主要遺跡と幹線想定図 (『古代の役所と寺院—郡衙とその周辺—』より)

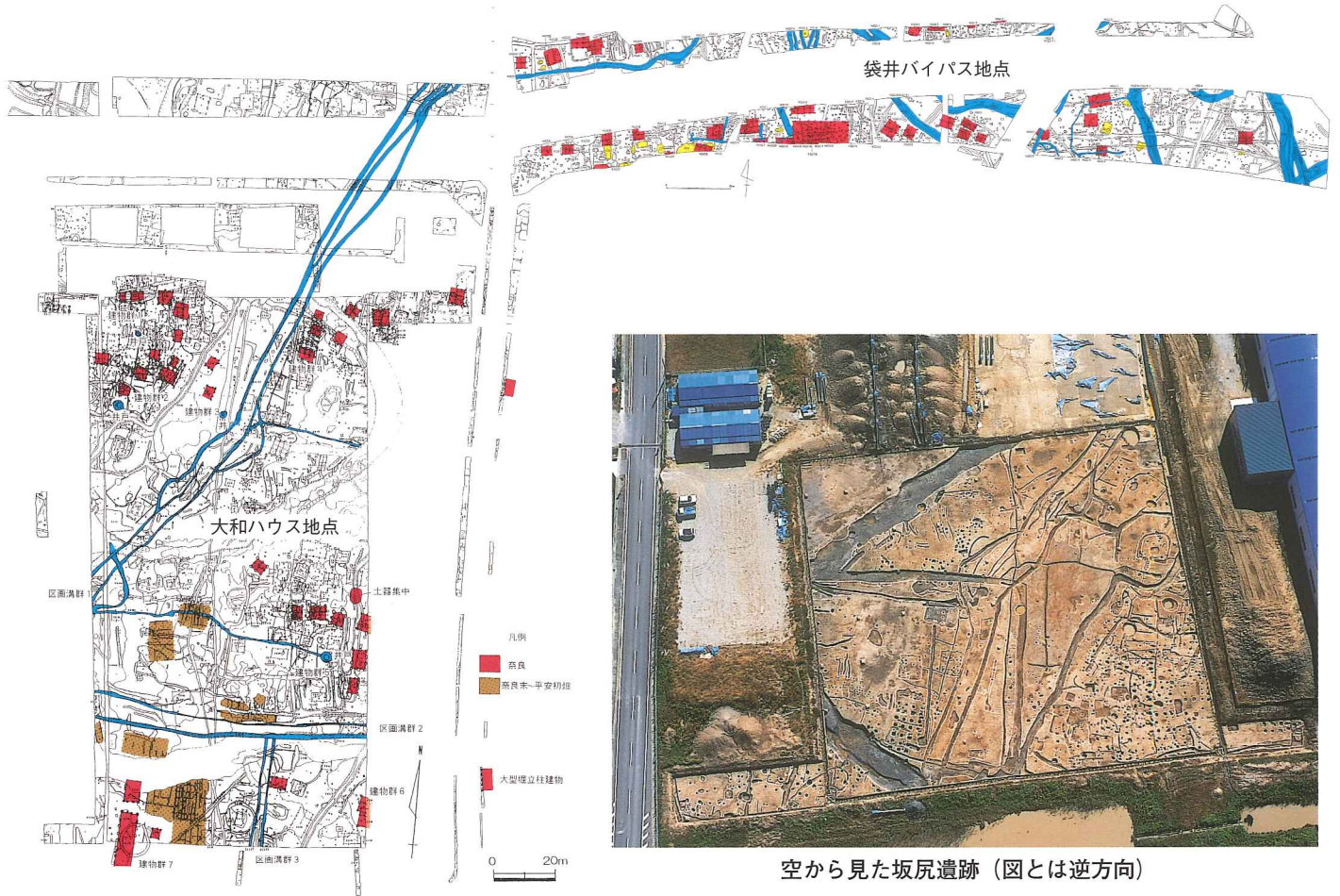
さかじり 坂尻遺跡

袋井市の東部、原野谷川西岸にあたる標高17mほどの自然堤防上の微高地に立地している。水運に関する原野谷川と陸運に関する古代の東海道と、ほぼ同じ場所を通っていたと推定される近世の東海道が交差し、交通の要衝としての郡衙関連遺跡が立地するうえで条件の整った場所に位置している。

「佐野厨家さやのくりや」や「日根駅家ひねのうまや」などの墨書土器が出土したことで知られ、佐野郡衙と駅家が併設されていた可能性が高い遺跡である。奈良時代の遺構は袋井バイパス地点と大和ハウス調査地点から良好な資料が発掘されている。

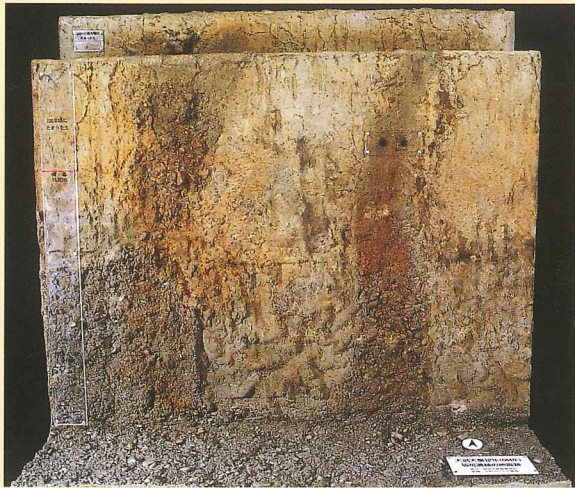


大型掘立柱建物群 (大和ハウス調査地点)



坂尻遺跡全体図 (奈良時代)

空から見た坂尻遺跡 (図とは逆方向)



「白鳳の噴砂」

『日本書紀』天武天皇13年(684)10月14日条に地震の記録が見られ、11月には南海大地震が発生し、連動して東海地震が発生したことが、坂尻遺跡などの液状化現象で確認できる。坂尻遺跡からは、この白鳳の東海地震の痕跡が住居跡や川跡から確認されている。



袋井バイパス地点の調査



円面硯 小型長頸壺 獸足壺



銅印(印文「松」)

印面は縦・横3.1cm、現存高2.4cm、重量27g。佐野郡を構成する小松郷の「松」か、個人印の可能性もある。



連弁文分銅

平安時代の土器とともに出土。笠の直径3.1cm、高さ2.9cm、重量82g。笠には連弁状に15本の稜線が付く。



墨書土器

遺跡の性格を示す墨書土器が多く出土している。郡衙名を記した「佐野厨家」、駅名を記した「日根駅家」「三年水鉢 駅」、下級役人の役職名の「駅長」「駅當」「駅子」などがある。



木製品

つち はし 土橋遺跡

袋井市の西部、太田川の東岸に展開する標高9mほどの自然堤防上の微高地に位置している。袋井バイパスの調査区からは6棟の掘立柱建物群と直線的な溝が1本発掘されたが、建物の柱の規模は小さく、主軸方向に規格性がなく官衙的要素はみられない。しかし、まとまりのある墨書土器が発掘され、国府の厨家くわくりやに関連する「国厨」などが出土している。



木筒「二斗五升」

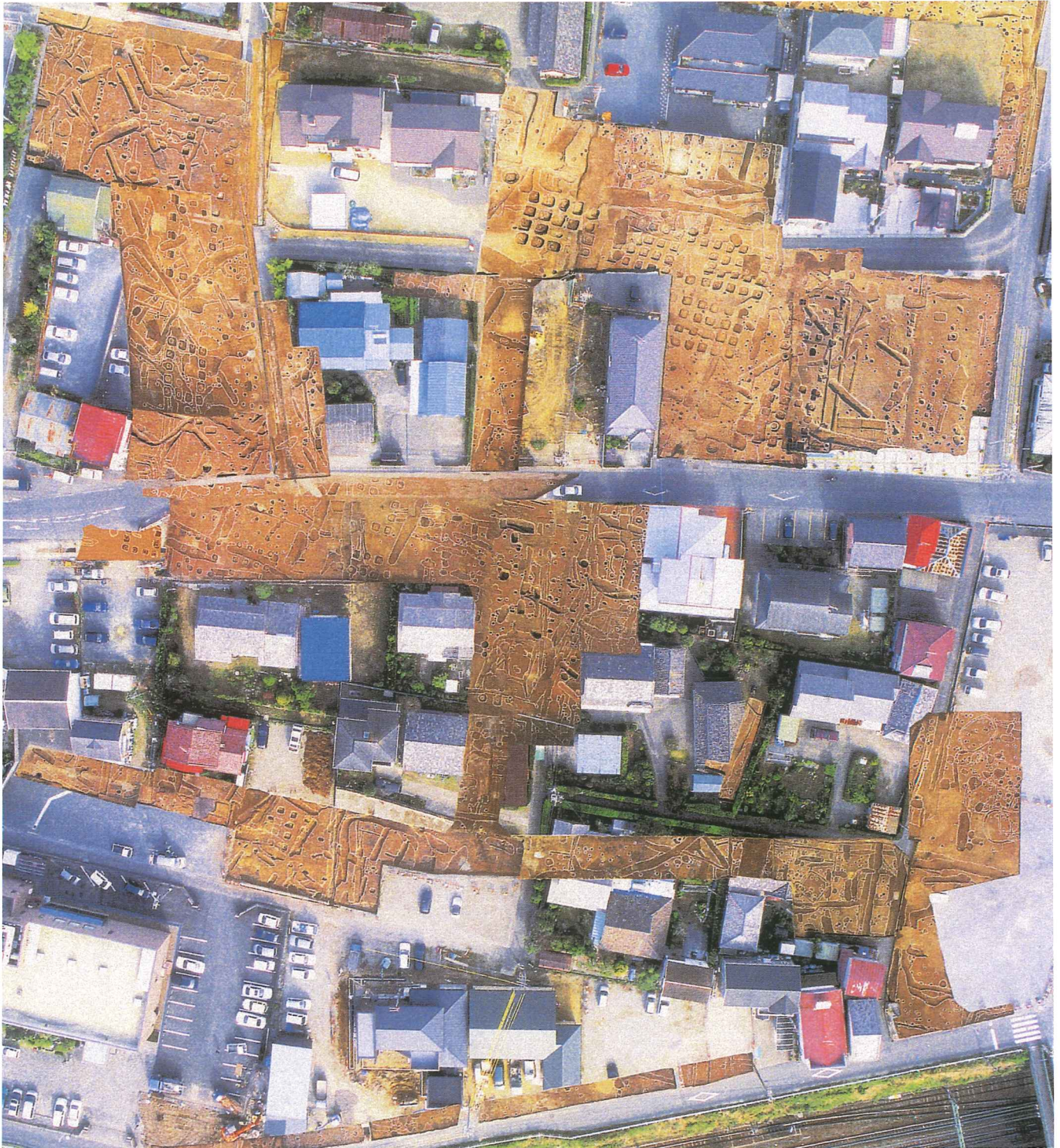


墨書土器

かけのうえ 掛之上遺跡

袋井市の中央部、原野谷川西岸にあたる標高19mほどの河岸段丘上に立地している。南側に広がる大門遺跡とはJR東海道線で分断されたが、ほんらい同一遺跡と考えられる。水運に関する原野谷川と陸運に関する古代の東海道が存在し、交通の要衝としての郡衙関連遺跡が立地するうえで条件の整った場所に位置している。

これまでの調査で、口の字形に倉庫群が配置され、中央部に広場を持つ正倉域がみつまっている。この中には全長22mにもなるならびぐら双倉が含まれている。文字資料は出土していないが、山名郡衙の可能性が高い。



空から見た掛之上遺跡（合成写真）



掛之上遺跡の倉庫群

発見された倉庫群は、山名郡の正倉と推定され、中央の広場を囲むように東西約70m、南北約80mの範囲に「口」字型に高床倉庫が配置されている。

多くの倉庫は2×3間口(柱間7尺)の総柱構造だが、北東隅の1棟は双倉となっている。

現存する双倉は法隆寺銅封蔵や東大寺の正倉院などが知られているだけとなっている。これら倉庫が立ち並ぶ西側には、柱間が9尺で3×5間口以上の長殿風建築も存在し、その構造から役所の正殿ではないかと考えられる。

これら郡衙中枢部を区画する幅4mの東・西・北の溝も発見され、方形に区画されたことも判明した。



ならびぐら
双倉の建物復元図



双倉の発見状況

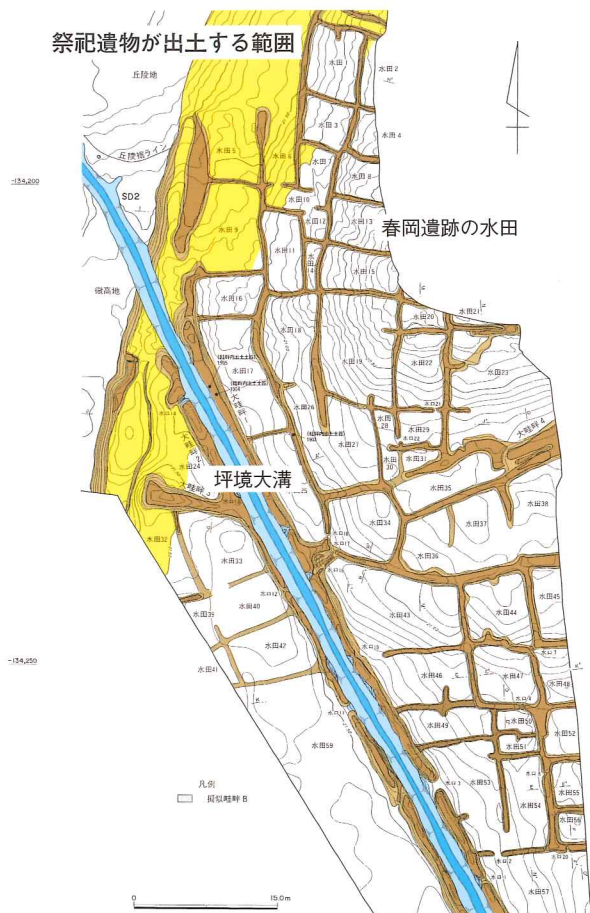
(2つの倉庫が合体したような建物で、真ん中の部分が吹き抜けて床もなく出入口は内部につけられていた)

はるおか 春岡遺跡

袋井市の北部、太田川の東岸に展開する標高25mほどの自然堤防上の微高地に立地している。周智郡衙と推定される稲荷領家遺跡とは近世の太田川により分断されたが、本来同一の遺跡と考えられる。

水運に關した太田川と、陸運では古代の東海道より遠江国の北部を並走し、浜名湖北岸を經由する北部の幹道が通過していたと推定され、交通の要衝としての郡衙関連遺跡が立地するうえで条件の整った場所に位置している。

舌状丘陵の先端部分と自然堤防の背後湿地に営まれた条里型水田、低湿地との境に廃棄された祭祀遺物、「坪境」を区画する大溝が発掘されている。



奈良時代の水田と坪境大溝



奈良時代の水田



掘り出されたばかりの木簡



墨書土器「若」



辛人部 白人
若倭部 赤麻呂
瓜工部 逆
伊蘇部 □□
合五人 □□□部 首支

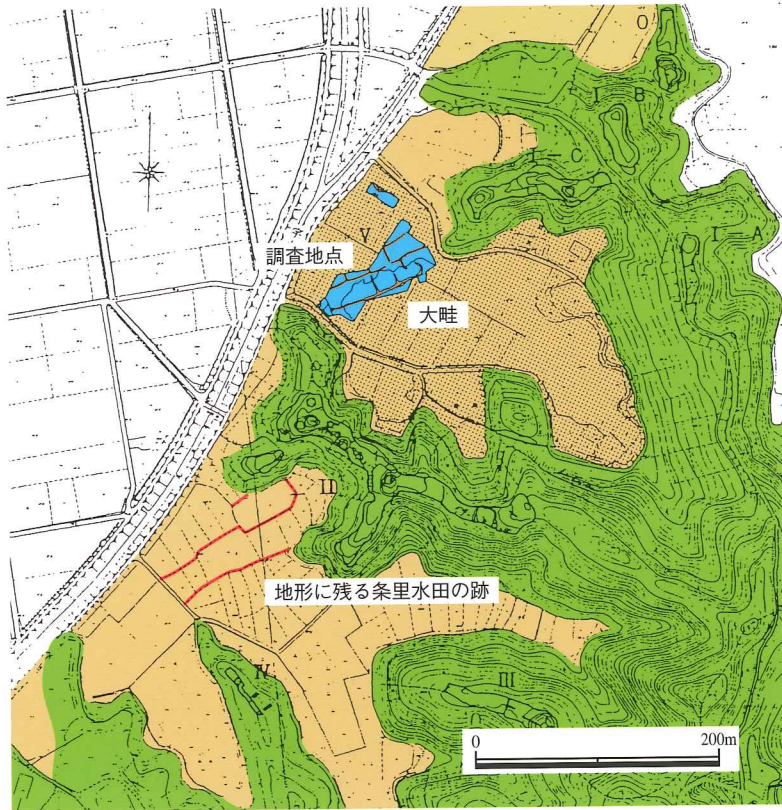
●読み下し(部はアの字が用いられているが一般的な部で表わした)

復元木簡
上部を欠損し、用途を断定できないが、上下二段に整然と五人の人名が記されている。

かわた とうぞうぶち
川田・藤蔵淵遺跡

袋井市の北部、春岡地内に位置する。宇刈川に面した丘陵に囲まれた谷地形で、開口部より奥部まで約200m、幅約100mの規模を持っている。春岡遺跡で発掘された条里型水田の方向と一致する水田が発掘され、奈良時代に広域条里が存在することが確認された。

坪境をなす大畦の中からは、畦を造るときと一緒に埋められた長胴の土師器甕2個体(底に穴を空けている)が、口を東に向け置かれた状態で発掘された。



川田・藤蔵淵遺跡の周辺



奈良時代の水田



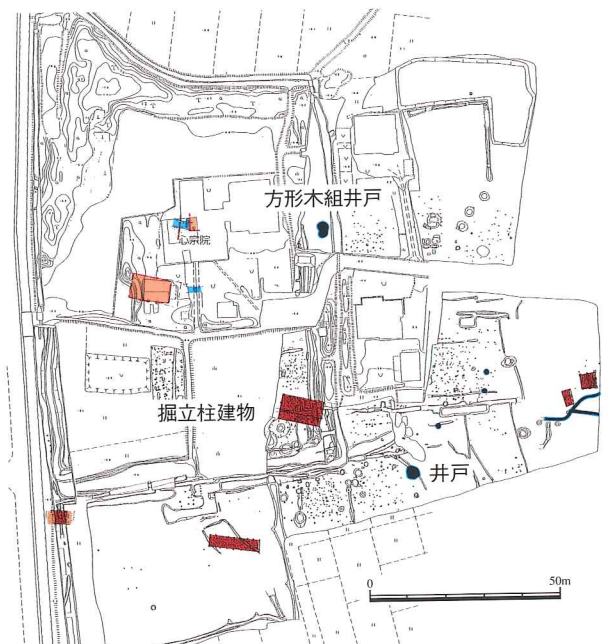
大畦に埋め込まれた甕が出土した状況

もろい じゅうにしよ
諸井十二所遺跡

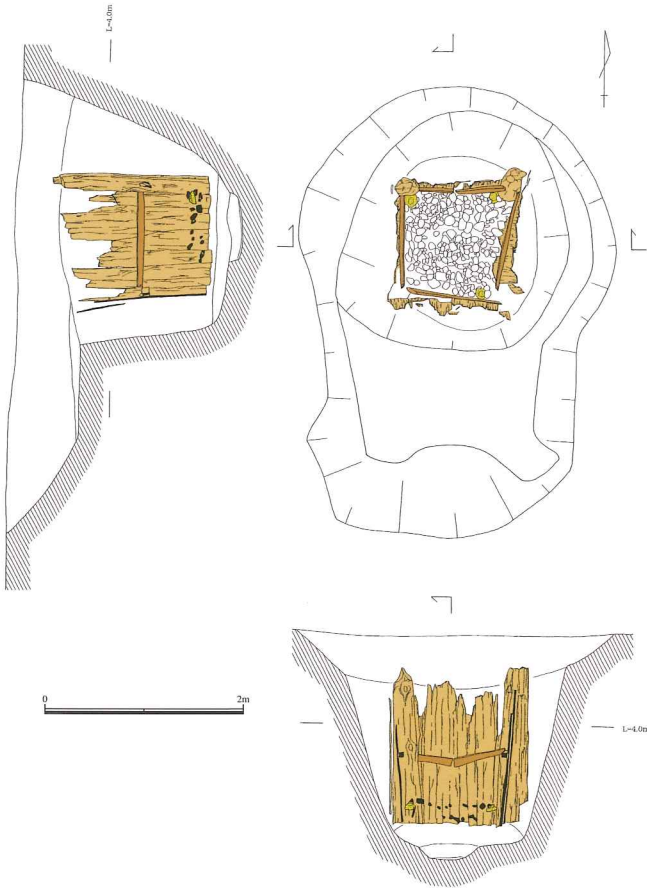
袋井市の南部、原野谷川と小笠山丘陵末端の諸井台地に挟まれた標高5mほどの自然堤防上の微高地に位置している。弥生時代から続く遺跡であるが、奈良・平安時代にも集落が存在した。

この地は平安時代後期に成立した山名荘(熊野山領)の南端にあたり、白河・鳥羽・後白河の三上皇が、崇敬篤い寺社に寄付した領地の一つで「三代起請地」と呼ばれている。

公的な施設で使われる方形木組井戸をはじめ、方向を同じくする大型掘立柱建物群が存在した。中心部は現在の心宗院と重なり、その構造は不明だが、瓦塔が出土するなど、熊野十二所権現の社殿を中心とする山名荘の施設が存在したと考えられる。



十二所遺跡の調査地点



方形木組井戸



天禄2年(971)に切り出した柱【左】、
康保4年(967)に切り出した柱【右】



呪符土器

十二所遺跡の方形木組井戸と呪符土器

10世紀終わりから11世紀終わりにかけて使われた井戸で、四隅に柱をすえ、板材を組み合わせ、底には礫を敷き詰めた本格的な構造で、役所や寺社などで用いられた。

一般の井戸は素掘りか井戸枠に曲物を使う簡単なものである。井戸の三隅には小碗(11世紀中頃)が伏せて置かれ、このうち西北(乾)・東南(巽)のものは内面に朱書きの呪符が記されている。験者による封印のまじないか。



瓦塔

木造建築の塔を模した焼物の小塔を瓦塔とよび、木造の塔の形を模して各層ごとに焼いてから組み立てたもの。奈良時代から平安時代にかけて造られた。用途については木造塔の代用説、礼拝の対象、あるいは墳墓の標識などとする説があるが、明確にはなっていない。

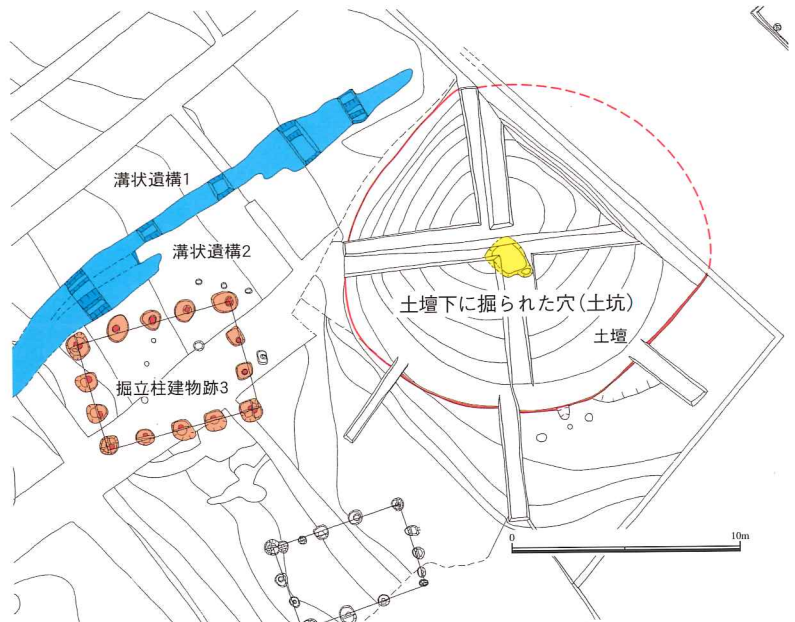
この瓦塔片は遺構に伴うものではないので明確な時期は不明だが、渥美窯で焼かれた平安時代後期ものと考えられる。

こしんでん 古新田遺跡

袋井市の南部、小笠山丘陵南西麓の標高17mほどの諸井台地上に位置している。この遺跡は5世紀代の豪族居館として知られているが、奈良時代の集落も存在し、集落の奥まった場所には土壇と大型掘立柱建物、溝がセットとなる一画が存在する。

土壇下の中央からは、割った須恵器・土師器を捨てた浅い穴が見つかり、祭祀を行ったのち、土を盛り上げて土壇を造ったと考えられる。

建物は桁行四間×梁行三間、面積約32m²の規模を持ち、柱をすえるために掘られた穴の径は1m近くある。これらがどのような性格のものであるかは今後の課題である。



古新田遺跡の土壇と大型掘立柱建物

にいぼり 新堀・北ハサマ遺跡

袋井市の南部、海岸低地中央部に展開する標高2mほどの自然堤防上の微高地に位置している。遺跡の東側一帯には近世期まで遠州灘につながる潟湖(ラグーン)が存在し、原野谷川・太田川の末端はこれに注いでいた。

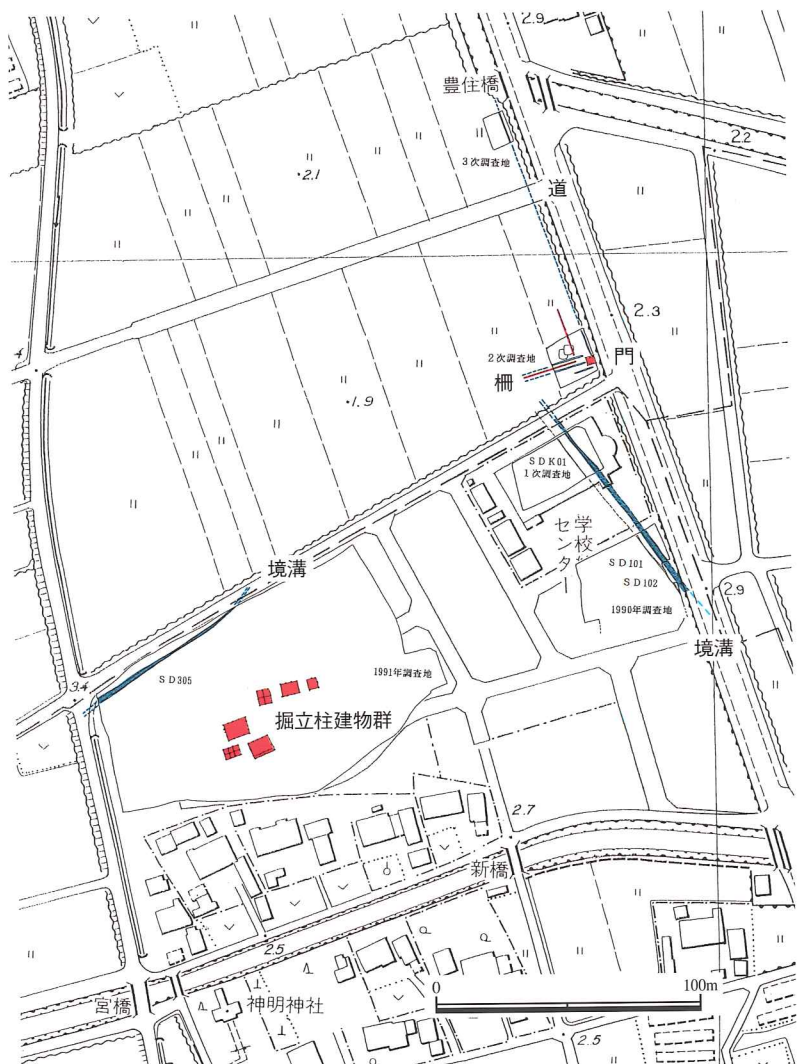
遠江国府、国分寺の所在する今の浦、大池に通じる官衙関連遺跡群の水運ネットワークが存在したと考えられ、その最末端に遺跡は位置する。

新堀遺跡からは6棟の掘立柱建物と柵列、井戸、区画溝が発掘されているが、官衙的建物配置はみられない。区画溝から「山名厨」「長」と記された墨書土器が発掘され、昨年の調査では石川寺系の軒丸瓦が出土した。



軒丸瓦

清ヶ谷古窯跡群で焼かれたと推定される、重圏文縁十六葉細弁蓮華文軒丸瓦



新堀・北ハサマ遺跡の調査地点

こんげんやま
権現山遺跡

袋井市の南部、浅羽海岸平野南の東西方向に延びた標高1 mほどの砂堤上に位置している。松原地区周辺には奈良時代の蔵骨器(3例)や平安時代の墳墓が点在している。

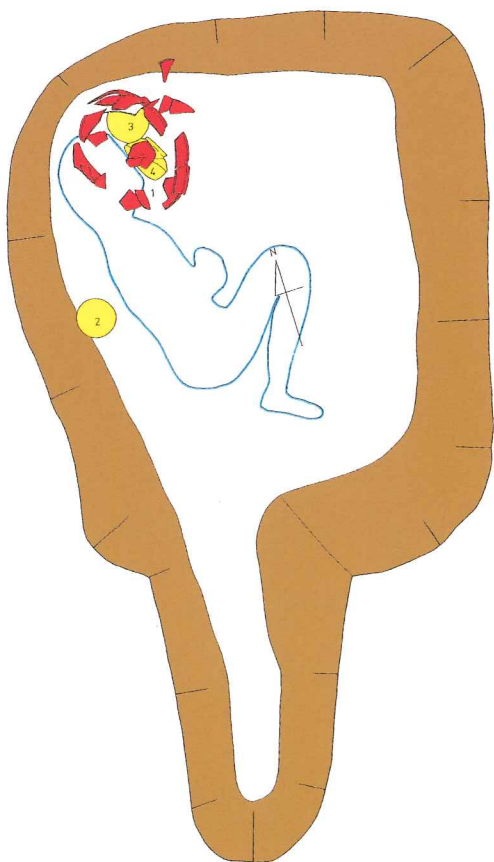
特に奈良時代の蔵骨器は火葬骨を納めたもので、土葬が主体の一般民衆の墓制とは異なり、下級役人のものと推定される。松原地区の砂堤上は、当時下級役人層の墓地であった可能性が高い。



死者の頭に被せられた鉢と副葬の碗



火葬骨が納められた甕(8世紀の長胴甕を使用)



権現山遺跡の直葬墓

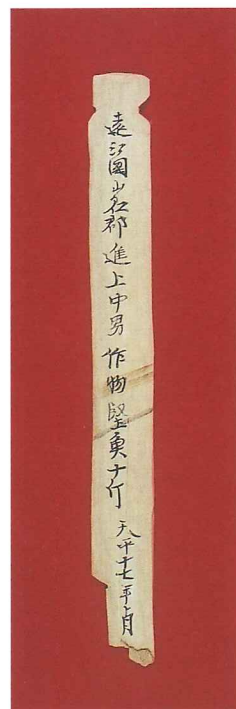
11世紀後半に造られた墳墓で、平面の形は横穴式石室に似ている。内部は死者の頭に鉢を伏せ、その周りに3個の碗が添えられていた。鉢の中には頭骨が残っていたが保存状態が悪く、取り上げることはできなかった。

●読み下し
遠江国山名郡進上中男作物堅魚十斤 天平十七年□月

復元木簡(現品 奈良文化財研究所蔵 復元品は許可を得て袋井市が作成)
平城宮から出土した木簡で、天平十七年(七四五)遠江国山名郡から納められた中男作物の付札。山名郡は袋井市中央部から浅羽海岸に及ぶ範囲で、当時は入江が深く入り込み、山名郡でも盛んに漁業が行なわれていたことを推測させる。

遠江国山名郡進上中男作物堅魚十斤 天平十七年□月

●読み下し



遺跡でたどる袋井のあゆみ

第3弾 奈良・平安時代の巻

編集 袋井市立 浅羽郷土資料館 TEL 0538-23-8511

発行 袋井市教育委員会 生涯学習課文化財係

本書は資料館企画展(平成19年2月6日~3月18日)展示図録を兼ねた文化財啓蒙資料です